

(別紙2)

審 査 の 結 果 の 要 旨

カンディア デ ソウザ、マリア クラウジア

既存の美術館やギャラリーとは違った、アーティストによる自発的な活動拠点（オルタナティブ・アートスペース）が衰退地区において交流の場となり、市民の参加意識や創造性の向上に寄与するという現象が日本においても見られるようになってきている。特に横浜や大阪においては、活動拠点が群として存在するようになり（オルタナティブ・アートビレッジ）、地区居住者・周辺からの来街者の生活の一部として定着している状況を見ることができる。これらのアートスペースについては個々の活動に注目した研究を見ることができるが、群となった場合に地区や訪問者の行動にどのような影響を与えるかについては十分な解明がなされていなかった。

本論文は、アートスペースの集積が顕著である大阪・此花地区と北加賀屋地区を対象に、その配置がどのように訪問者の行動パターンに影響を与えているかを研究したものである。社会ネットワークで用いられるアフィリエーション・ネットワークの概念を用い、分散しているアートスペース間の結びつきをアンケート調査から解明し、その空間的ネットワークを考察するという手法に研究の特徴を見ることができる。第一章では大阪のアートビレッジをアート活動の時系列・施設・活動主体から整理し、その状況にアフィリエーション・ネットワーク概念を適用する本研究の手法を紹介している。第二章の既往研究の項では、都市再生におけるアートスペースの意義に理論的裏付けを与え、多様な領域で用いられているアフィリエーション・ネットワークの研究手法を整理することで、同手法がアートスペースの配置研究にも有効であることを論じている。研究手法について述べた第三章では、地域住民・来街者のアート拠点への参加形態に関するアンケート調査の方法と、アンケート結果をもとにしたアートスペースの空間的連関の描出がなされている。アートスペースと訪問者の2つのノードからなる二部グラフを作成し、それをアートスペースのみからなる一部ネットワークへと展開し、アートスペースの関係性の描出と空間的配置の分析を行う、という独自の手法についても詳細な記述がなされている。第四章では、此花地区と北加賀屋地区の比較、訪問者の特性のアートスペースの空間的連関への影響が考察され、アートスペースが集積することで訪問者の回遊性が大きく向上することが導かれている。

以上のような内容を踏まえ、本論文の審査が行われた。まず、研究全体については、都市再生でも重要なテーマとなりつつあるアートによる地域の創造性を、アートスペースの空間配置によって解明しようとしている点が意義深いとされた。アフィリエーション・ネットワークの描出については、より洗練された方法が可能であり、例えばアンケート調査に代わり、IT 技術の導入によって多くのデータを取得するなど、方法論的転回に言及するべきとの意見も出された。同時に、実際の都市再生にこの研究がいかに関与するか、記述を豊富化すべきとの意見も出された。

一方で、研究対象となった此花・北加賀屋地区についてはアートビレッジの実態が十分に研究されていないため、第一章で整理された地区内のアート活動の記録は一定の資料的価値があるという意見も出された。それを踏まえ、国内および海外の他のアートビレッジの集積との比較研究へと展開するよう、研究対象地域の研究についての示唆も出された。

同地域のアートビレッジの状況について、近年の大阪の文化政策がどのように影響しているか、研究の前提についての説明も詳細になされた方が良いという意見も提出された。

以上のように研究が関連する領域について、本研究がいかに関与しているかの説明が求められたものの、研究の主軸であるアフィリエーション・ネットワークの都市空間研究への応用に新規性・独自性がある点は高く評価された。訪問客の種別（住民・来街者・アート関係者など）ごとに描出された目的ネットワークについては、回遊行動を説明する簡便なツールとなりうるため、その手法の展開が期待されるという意見も出されている。

実態調査の少ない大阪のアートビレッジの現地調査を丁寧に行い、その一次資料をもとに独自の手法を構築し、手法自体の評価を行ったという点において、本研究に対しては審査会において一定の評価がなされている。その独自性と展開力、アートを中心とした文化政策に寄与する具体的な知見の提供を勧告するならば、本論文の内容が学位論文に求められる水準に十分に達していると判断される。よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。